



# 土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering  
Japan Society of Civil Engineers

No.28 2004.12.

## 目次

土木史ニュース	平成 16 年度 選奨土木遺産	1
フォーラム	湊川隧道～地域の宝である土木遺産を活用した活性化への取り組み	2
海外土木史	ICOHTEC(国際技術史学会) 第 31 回シンポジウム「技術景観の再デザイン」 デレークには日本人女性との間に息子がいた	3
地域のニュース	土木遺産と教育活動(3)～野蒜築港と生涯学習	4
関連団体ニュース	日本大学理工学部科学技術史料センター(CST MUSEUM)設立	5
学会の動き	平成 16 年度 第 59 回土木学会全国大会報告 平成 16 年度 第 30 回土木計画学研究発表会・秋大会報告 「第 25 回土木史研究発表会」の開催と講演用論文及び討議欄の募集	5 5 6
文化財ニュース	文化財となった土木関連建造物等一覽	7
土木史関係図書	都市保全計画、産業遺産とまちづくり、コンクリートの文明誌	8

## 土木史ニュース

### 平成 16 年度 選奨土木遺産

NO	対象構造物(竣工年)	認定書に記載する趣意文	支部	所在地
1	函館港改良施設群 - 船入潤防波堤(明治32年) - 第1号乾ドック(明治36年)	北海道港湾修築の嚆矢的構造物群で最初期の港湾コンクリート。廣井勇設計のコンクリートブロック基礎の船入潤防波堤やコンクリートブロック造乾ドック	北海道	北海道 / 函館市 函館市
2	十勝川千代田堰堤(昭和10年)	国内有数の農業王国十勝の礎となり、十勝川治水開闢期の歴史を伝える大規模固定堰	北海道	北海道 / 池田町
3	北上川分流通施設群 - 鶯波締切堤(昭和6年) - 鶯波洗堰(昭和7年) - 脇谷洗堰・開門(昭和7年) - 脇谷水門・放水路(昭和6年) - 福地水門(昭和5年) - 釜谷水門(昭和3年) - 月浜第一水門(昭和3年) - 月浜第二水門(昭和3年)	戦前の大規模分水事業、北上川第一期改修工事にて建設された施設。我が国の分水堰技術の黎明期に選定された希少なゲート形式群	東北	宮城県 / 豊里町・津山町 豊里町 津山町 津山町 河北町 河北町 北上町 北上町
4	野辺地防雪原林(明治26年)	日本鉄道(株)の防雪対策として植栽された、わが国最初の防雪林。自然資源の有効利用による希少な土木遺産である。	東北	青森県 / 野辺地町
5	十綱橋(大正4年)	飯坂温泉街の中心地に位置し、プレストリプアーチが美しい日本最古級の大正期の鋼アーチ橋。歴史を物語る貴重な土木遺産である。	東北	福島県 / 福島市
6	榛名山麓砂防堰堤群(明治15～35年)	明治期にデ・レイケの指導を受けた技術者によって造られた砂防堰堤群。自然石を用いたアーチ形状と、天端の縄たるみ形状が美しい。	関東	群馬県 / 伊香保町、榛東村、吉岡町、箕郷町
7	柳原水閘(明治37年)	明治期に造られた樋門で、4連アーチの大規模な煉瓦造りは美しく、数少ない貴重な構造物	関東	千葉県 / 松戸市
8	聖徳記念絵画館前通り(大正15年)	東京を代表する道路景観であり、ワービット工法を利用したわが国最古級の車道用アスファルト舗装	関東	東京都 / 新宿区
9	甚之助谷砂防堰堤群(昭和6～14年)	近代以降荒廃の著しい白山から下流域を守り続ける、日本で最古級の階段式砂防堰堤群	中部	石川県 / 白峰村
10	三国港エッセル堤(明治15年)	設計エッセル、施工デ・レークによる粗朶沈床工の防波堤で、水制とともに導流機能も果たした明治初期を代表する港湾施設である。	関西	福井県 / 三国町
11	梅小路機関車庫(大正3年)	大正3年設置以来、日本の近代化と復興・成長を支えた蒸気機関車の歴史を伝え、動態保存された世界最大級の蒸気機関車庫である。	関西	京都府 / 京都市
12	オランダ堰堤(明治22年)	明治15年デ・レーク指導田邊義三郎設計とされる切石布積みアーチ式堰堤。関西治水史上重要な淀川水源地上砂防施設群の一つ。	関西	滋賀県 / 大津市
13	若桜橋(昭和9年)	昭和九年に完成した鬼ヶ城の山々に映える3連の美しいヴォールト・アーチ橋であり、今も活用されている。	中国	鳥取県 / 若桜町
14	牛島(明治20年頃) 藤田・西崎の波止(明治20～26年頃)	利用者により結成された協同組合の自主施工による波止場で、昭和初期まで組合により運営され、今も保存、活用されている。	中国	山口県 / 光市
15	第二領地橋梁(昭和13年)	本橋は日本初の鉄道用5径間連続RC開腹アーチ橋である。太平洋に面する断崖に、大スパンのアーチが力強く架かっている。	四国	高知県 / 須崎市
16	名島橋 *「名島橋」(昭和8年)及び「名島川橋梁」(大正12年)	名島橋は、耐震性に優れたアーチ式構造。白く輝く御影石に覆われた優美な姿。名島川橋梁は、大正期の長大RCアーチ橋。アーチを強調する突起等、秀逸な意匠。	西部	福岡県 / 福岡市
17	山の浄水場群(明治41年、大正15年)	佐世保市の水需要を支えてきた施設。敷地内にある様々な構造物は明治期、大正期の建物の様式を残しており、意匠的な工夫が見られる。	西部	長崎県 / 佐世保市

## 湊川隧道～地域の宝である土木遺産を活用した活性化への取り組み～

兵庫県神戸県民局 県土整備部 神戸土木事務所 公園防災課課長 西海 伸行  
 パシフィックコンサルタンツ(株)大阪本社総合計画部 高木 宏二

### 1. はじめに

古代から神戸地方の中心であり、中世・近世には兵庫の津として栄えた神戸市兵庫区に湊川隧道(会下トンネル)はある。我が国初の河川トンネルとして明治34年(1901)に竣工した湊川隧道は、平成13年に竣工した新湊川トンネルの完成に合わせて、約一世紀にわたる河川トンネルとしての任務を終えたが、現在もレンガと花崗岩を身にまとった壮大な空間を残している。兵庫県では、湊川隧道の歴史的価値を検証し、保存・活用の方向性を検証するため、平成12年度に保存検討委員会(委員長:西田一彦 関西大学工学部教授)を設置した。保存検討委員会では「日本を代表する技術者である沖野忠雄や瀧川釘二が関わった高い技術を持って構築され、規模においても当時の世界最大級を誇ること」「湊川隧道の建設が“神戸”と“兵庫”の分断を解消し、地域の発展に大きく貢献したこと」など、様々な観点からの歴史的価値の高さが認められた。また、力学的解析により、将来においても十分に安全性が確保できることが確認された。こうした検討を背景に、湊川隧道は保存されることが決まり、その活用については、継続的に検討することとなった。

### 2. 保存友の会での取り組み

湊川隧道を保存し、その価値の幅広い周知を図るとともに、将来の活用方策を模索するため、平成13年7月、地域住民や行政関係者、学識経験者等の有志で構成された“湊川隧道保存友の会(会長:神吉和夫 神戸大学工学部助手)”が設立された。友の会では、講演会の開催、会報の発行などを行っているが、とりわけ隧道の一般公開は会を挙げてのイベントとなっている。ここでは、この一般公開に向けた取り組みを紹介する。

手探りでの取り組みから、最初の一般公開は、兵庫県が主催するイベントの一部として行われた。友の会では手探りの状況ながら、ボランティア等の協力を仰ぎ、警備・誘導等を中心とした役割を担った。一般参加者の感動を目の当たりにし、会員も隧道の素晴らしさを改めて感じたようであった。

友の会主体での取り組みに、次の段階では、友の会が主体となる一般公開が実施された。この段階ではそれまでの経験を踏まえ、一通りの運営に関する準備はスムーズに行うことができた。その一方で、「一般公開の運営者は、参加者に隧道のことを説明できるようにならなければ」という意見も聞かれるようになり、事前に隧道に関する勉強会を実施して一般公開に備えた。さらに、単なる見学に留まらない新たな企画が模索され、隧道内でのコンサートを実施することとなった。隧道内で楽器を演奏するとどのように響くのか、音響の専門家によるアドバイスとリハーサルを繰り返し、金管楽器と弦楽器によるコンサートが実現した。隧道の幻想的な雰囲気の中での音の演出は、まさに感動の一言であった。

他団体との連携・協働へ:その後、友の会は新しい動きを見せつつある。もともと湊川隧道が一部を担っていた“新湊川”では、周辺住民が主体となった“新湊川を守り育てる会”が結成された。平成16年9月には“新湊川を守り育てる会”主催の“新湊川まつり”に協力し、友の会がトンネルを公開して盛り上げた。

### 3. 今後の発展に向けて

3年を経過した友の会の活動により、隧道に対する愛着と誇りが芽生え始めている。さらに、他の団体との連携も生まれ、コミュニティが、地域の宝である湊川隧道を活かしながら、まちを活性化させる、「コミュニティ主体のまちづくり」が実現されようとしている。ただ、友の会の運営は、必ずしも順風満帆なわけではない。会員の会費だけでは到底足りない活動資金、仕事の合間に活動を行わねばならない担い手の現状、新たなパワー・アイデアを吹き込んでくれるような若い人材の確保など、課題は山積みである。こうした課題を克服し、さらなる飛躍が期待される。

“天長地久” - 湊川隧道の吐口側坑門に掲げられた言葉である。これは、人為の土木構造物が悠揚と存続することを願った言葉だそうである。湊川隧道が、周辺のコミュニティに愛され、有効に活用され、未永く存続していくことを願う。



湊川隧道内の様子

隧道内コンサート



## ICOHTEC(国際技術史学会) 第31回シンポジウム「技術景観の再デザイン」

近畿大学理工学部 社会環境工学科 岡田 昌彰

2004年8月、さまざまな切り口から近代化遺産やテクノスケープの新たな地平を拓こうという意欲的なシンポジウムが開催された。この“国際技術史学会(ICOHTEC)”第31回シンポジウムには、ドイツ・ルール工業地帯の中心都市の1つ、ボーフム(Bochum)市を舞台に、欧米・中東・アジア・豪州など世界各国から約100名が参加した。「技術景観の再デザイン」と題されたシンポジウムの参加者は、土木工学のほか歴史学、地理学、アートなど多岐にわたる専門分野の研究者や実務家からなり、筆者がプレゼンターとして参加した「テクノロジーによる都市・社会・自然の変容」をはじめ「テクノロジーと芸術」「ヨーロッパの技術風景」など学際性に富んだ多彩なセッションによるプログラム編成がなされていた。

ICOHTECは冷戦中の1968年に、東西諸国の学者が集い、技術史に関する話題を相互交換する場として設立された。国際科学史・科学基礎論連合(IUHPS/DHS)を通してユネスコとも連携しているが、主に会員の基金によって運営される完全独立機関として機能し続けている点も特徴的である。ほぼ毎年開催されるシンポジウムと、その内容をもととしたプロシーディング(ICOHTEC journal ICON)刊行、年に2~3度のニュースレター発行などを主な成果物としている。

今回のシンポジウムのもう1つの大きな特徴は、その会場選定にある。会場となった「ドイツ鉱山博物館(Deutsches Bergbau Museum)」は、地上68mの高さをもつ巨大な縦坑(ルール工業地帯内の炭鉱から移築)とともに1930年に完成した(写真2)。

1930年代に既に「鉱山博物館」が設立されていた



写真1 ICOHTEC 第31回シンポジウム「技術景観の再デザイン」ポスター

という事実そのものも興味深い。また、立地地区が市民公園周辺の住宅地に近いこともあり、この縦坑は長年まちの象徴として存在し続けている。博物館は本シンポジウムの主要テーマの1つである技術史そのものを直接学ぶ場であると同時に、今回のサブテーマ「技術風景」を考える上でも格好の事例であるのだ。本誌23号(2003年)にでもご紹介したように、会場選定にまでシンポジウムの趣旨が強く反映されている点は、欧米におけるこの種のシンポジウムの特徴の1つと言えるであろう。博物館には掘削機械なども収集・展示されており、参加者たちはたった今シンポジウムの会場で議論した内容を最も身近な“会場”にてすぐさま確認できるのである。

このシンポジウムのもう1つの注目すべき点は、3日間にわたって開催されたエクスカージョンである。ドルトムント、エッセン、ハッティンゲンといった域内の基幹工業都市における一連のエムシャールパーク(遊休工業地帯の利活用公園)を効率的に視察するものである。参加者たちは毎回少人数のチームに分かれ、地元学芸員たちによる各製鉄所の詳細な経緯や各施設の機能、黄金比やピスタを多用した創設当時の工場景観・空間の設計理念、ならびに現在の活用法やその課題などについて説明を受け随時質疑応答しながら敷地を体験することができる。このように、シンポジウムのテーマに対する参加者の理解をいっそう促すための巧みな工夫が随所に見られた。欲をいえば、講演には学術的のみならず地元に関連をもつ内容が多分に含まれていたにも関わらず、地元自治体関係者や学生らの参加がやや少なかつた点は課題と言えるであろう。なお、2005年のICOHTECシンポジウムは中国北京市で開催される予定である。ICOHTECの詳細については、<http://www.icohtec.org/>を参照されたい。



写真2 会場となった Bochum のドイツ鉱山博物館 (Deutsches Bergbau Museum)

## デレーケには日本人女性との間に息子がいた

東洋大学国際地域学部 教授 松浦 茂樹

元内務省大阪土木出張所技手・片岡酉止は、次のように述べている。

「デレーケ氏は内務省土木局淀川出張所御用商人松岡治助の知人某の女を妾とし男子を生んだ。之を金をつけて他に養育せしめた事がある。(中略)大阪では今の土佐堀の出雲屋敷の役所の女中部屋に住んだ。淀川改修や図面は其二階で作った。」

この発言は、昭和13年(1938)8月7日、真田秀吉が中心となって行った「デレーケ時代の座談会」で行われた。時に片岡氏は78才で、デレーケが大阪にいた当時、青年であり、土木出

張所に勤務していたと考えて間違いないだろう。デレーケが大阪を本拠地としたのは、来日直後の明治6年(1873)9月から14年10月の一時帰国の間である。

14年6月に妻ヨハンナが死んだ。三宅雅子は、その著「乱流」(1992年)の中で「絹」という女性を登場させ、デレーケとの間で息子ができたが明治29年(1896)の揖斐川の氾濫にあって死んだとしている。絹は岐阜県大垣出身で大垣の旅館で知り合ったなど、この話はフィクションであるが、事実は大阪でデレーケは息子をつくっていたのである。

### 地域のニュース

## 土木遺産と教育活動(3)～野蒜築港と生涯学習

- 野蒜築港ファンクラブにみる土木遺産と生涯学習 -

野蒜築港ファンクラブ事務局 松川清子

1998年は築港着工から120年目にあたり、(社)土木学会東北支部が野蒜築港120年委員会を組織した年です。以降、フォーラムやシンポジウムが継続的に開催される中で活発な情報提供や意見が寄せられるようになり、要望に応える形で2000年2月19日に野蒜築港ファンクラブ(以後「FC」と略記)は誕生しました。

現在、青森県から東京都まで47世帯50名、小学生から80代までの会員で構成し、「野蒜築港、酒のつまみにお茶請けに」をキャッチコピーに、「遺産の保存」「町の活性化」「情報収集」「さらなる研究」「文化の継承」あれこれを目指して活動(迷走)していますが、その中から生まれた新しい成果を紹介します。

FCは河川整備基金の助成を得て2002年に明治三大築港地(三国・野蒜・三角)新時代交流事業<川・港・子ども>サミットを開催しましたが、今年9月には福井県三国町が「明治三大築港シンポジウム」を開催、FCからも5名が参加して三港の交流が一步前進しました。

今年3月の悪水吐暗渠発見の第一報はFCが受け、土木学会へ連絡するなど、地元情報の発

信役も担っています。跡地に建つ「黒澤敬徳紀功の碑」の解説板寄贈の申し出が昨冬あり、寄贈者の思いと役所の難問を調整すること早1年、晴れて序幕の日を迎えました。

嬉しい風も吹いてきます。来年度鳴瀬町は矢本町と合併し東松島市になりますが、北上・東名運河を船上遊覧し互いの町の旬の味を楽しむ交流事業を町が企画しました。国交省が鳴瀬川と東名運河の交差点に新設した野蒜水門には野蒜築港レンガ橋台のイメージが活かされています。地区の方々は関連行事に多数が参加して下さるだけでなく、事前に共同清掃なども自発的に行って下さいます。

今年6月、明治14年の土木局出張所あとに地区のコミュニティセンターが完成し、町は野蒜築港資料室を併設しました。FCは10月から管理運営を委託されています。

地域や新市、関係機関と連携し、120年前、国家の夢を担って野蒜築港に従事した人々の息吹を感じながら、地域学習や交流の場として息長く活動するための定点にできればと・・・。



## 日本大学理工学部 科学技術史料センター(CST MUSEUM)設立

日本大学理工学部は、大正 9(1920)年に開設された日本大学高等工学校をその前身とし、昭和 3(1928)年には、私立大学でわが国 2 番目の工学系大学として土木・建築・機械・電気の 4 学科からなる日本大学工学部を発足、昭和 33(1958)年に理工学部と改称され、その間 85 年の歴史を築いてきた。こうした本学に関わる歴史・文化(遺産)を目に見える形で保存・継承・発展させることを目的とし、本年 4 月に「日本大学理工学部科学技術史料センター」(通称: CST MUSEUM)が設立した。当センターは、模型や実物などの「もの」と、史料や文献といった「こと」(歴史的記録)の両者を収集・展示する点が大きな特徴である。センターと聞くと、いわゆるハコモノをイメー



左から:海幸橋ヒンジ(日本初ランガー桁)、フェロセメントヨット、  
ダウンウインド型風向風速計、世界初の潮流発電装置 3号機  
写真 屋外展示物の一例(船橋キャンパス)

ジされがちであるが、本学では「もの」を屋外にも展示することで、日常的に学生・教職員・来校者の目にふれられるようにし、“キャンパスそのものがミュージアム”というかたちになっている。当センターのホームページ (<http://www.museum.cst.nihon-u.ac.jp>) では、本学に関連する歴史遺産情報の公開はもとより、学内外から関連情報が随時収集できるように設計されている。さらに、来年度は、千葉県博物館としての認定手続きを行うほか、学芸員養成のためのカリキュラムを実施する予定である。また、6月中旬開催される「土木史研究発表会」の会場が本学(船橋キャンパス)となることもあり、本学に関連する土木史関連遺産を特別企画展示することになっている。

### ■ CST MUSEUM 活動内容

史料の収集・整理・保管・展示 / 史料・展示等に関する技術的研究 / 各種史料に関する解説ならびに講習会・研究会・講演会・映写会等の実施 / 各種史料に関する案内書・解説書・目録・年報・調査・研究報告書等の作成および頒布 / 学芸員養成のための教育支援 / その他センターの目的達成に必要な事業など

(日本大学 岡田智秀)

## 学会の動き

### 平成 16 年度 第 59 回土木学会全国大会報告

土木史研究委員会は 9 月 8 日(水)に愛知工業大学にて特別セッション「土木史教育 - 講義と教材(1)(2)」と研究討論会「古市公威とその世界・トークショウ」を開催した。特別セッションでは土木史講義の現状やあり方、そして、普及の秘策? が議論された。また、教材については現在、土木史教材検討小委員会にて作成中の図録土木史年表の若手執筆者がパネラーとなり、その概要が紹介された。一般会員も含むフロアーからは活発な意見が出され、今後の土

木史教材や教育のあり方について建設的で熱い議論が展開した。小林一郎先生(熊本大学)を座長とする研究討論会的な発表形式が会場を盛り上げる結果となった。

トークショウは『古市公威とその時代』(11 月 18 日発行、税込 4,200 円)の紹介を兼ね、各テーマの執筆者が解説を行った。また、大会期間中(8~10 日)、パネル展が併設された。

(日本大学 知野泰明)

### 平成 16 年度 第 30 回土木計画学研究発表会・秋大会報告

平成 16 年 11 月 21~23 日、山口大学工学部(山口県宇部市)にて土木学会主催「第 30 回土木計画学研究発表会」が行われた。土木史関連として「土木史・土木遺産」セッションが岸井隆幸氏(日本大学)司会、中井祐氏(東京大学)コメンテーターにより開かれた。「小学校教育における土木事業の役割に関する研究」「土木遺産の魅力度とその評価方法に関する一考察」「本州四国連絡橋神戸 - 鳴門ルートの計画史 ~ 明石海峡大橋および大鳴門橋に関する道

路単独橋と鉄道併用橋の計画の変遷 ~」の 3 編の研究発表に対し、コメンテーターから「事業に対する歴史的批判性が必要ではないか」との刺激的な統括がなされ、これを口火に会場からも土木史及び土木史研究の意義、これからの課題などについて活発な議論がなされた。土木計画学だけでなく土木学会における歴史研究、土木史観の教育及びその必要性が問われ、土木史の本質的課題が会場で再確認されたことを報告する次第である。(岐阜大学 田中尚人)

## 「第25回土木史研究発表会」の開催と講演用論文及び討議欄の募集

土木史研究委員会（委員長：伊東 孝・日本大学教授）では、来年度の第25回土木史研究発表会の開催にあたり、下記要領にて講演用論文を募集いたしますので、奮ってご投稿下さい。なお過去の土木史研究発表会で未発表の論文について「土木史研究（論文集）Vol.25」（2006年6月刊）への掲載を希望される場合は、まず「講演用論文」として第25回土木史研究発表会で発表する必要がありますので、ご注意ください。また過去の「土木史研究」に掲載された論文についての討議欄も従来通り設置していますので、下記の要領で投稿を受け付けております。

1. 主 催：土木学会（担当：土木史研究委員会）
2. 期 日：2005年6月18日（土）～19日（日）
3. 会 場：日本大学理工学部船橋キャンパス
4. 募集内容：
  - （1）論文テーマ：自由（時代、対象、範囲等、すべて自由）。
  - （2）論文頁数：12頁以内（1頁2550字、9ポイント・25字×51行×2段組）。
  - （3）使用言語：日本語もしくは英語。
5. 応募方法：
  - （1）講演申込方法：A4判用紙に「第25回土木史研究発表会講演申込」と明記し、題目（副題も可）、発表者名・連名者名・所属、会員種別、連絡先・電話番号、和文要旨（200字程度）、過去の発表経緯、セッション分類（別記参照）を記述して、FAX または郵送にて申込み下さい。講演申込受付後、執筆要項等を送ります。
  - （2）講演申込締切期日：2005年2月11日（金）消印有効
  - （3）論文原稿締切期日：2005年3月25日（金）消印有効  
論文は『土木史研究（論文集）Vol.25』（2005年6月刊）に掲載されます。
  - （4）論文掲載料：論文原稿提出時にお支払い下さい。4頁まで14000円、6頁まで21000円、8頁まで28000円、10頁まで40000円、12頁まで54000円（10頁以上は累進制を採用しております）。なお、著者負担でカラー印刷も受け付けます（1頁あたり5万円程度で実費清算します）。
  - （5）セッション分類：プログラム編成上のセッション分類のため、下記に示す講演希望セッションを二種分類で記入して下さい。なお、該当する分類がない場合は、キーワードを適宜ご記入下さい。  
分野：人物史、技術史、社会・経済史（制度史を含む）、土木史一般（考古、研究方法論等を含む）事例報告、その他。  
分野：教育、測量、施工法、地域・都市、景観、交通（道路、鉄道等）、河川、海岸・港湾、衛生・上下水道、構造物（橋梁、トンネル、ダム等）、防災、エネルギー、農業（灌漑等）、保存工学・保存技術、修復・復元、土木遺産の評価方法、その他
6. 討議欄の募集要項：
  - （1）討議欄の対象論文：既に『土木史研究』で発表された論文のうち、特定する論文1編。なお、討議欄1回につき1人1編とします。
  - （2）討議欄の種別：討議の対象となる論文によって、種別を以下のように設けます。  
A：自己の過去の研究に関する新たな知見や訂正を述べるもの  
B：他者の論文に関する質問、意見を述べるもの
  - （3）討議頁数：1/2頁以上、2頁以内
  - （4）討議書式：書式（行数、字数など）は[討議欄A・書式見本][討議欄B・著者回答書式見本]に準じますが、以下の点を留意してください。  
英文題名、英文著者名、論文要旨は不要（本文は8行目から始める）  
討議の対象論文と、討議を行う理由を本文冒頭にて簡単に記すこと  
討議欄Bについては討議対象論文の著者（被質問者）の連絡先を合わせて提出すること
  - （5）掲載の採否：土木史研究編集小委員会で採否を決定し、討議者に判定結果を通知いたします。
  - （6）討議欄Bの著者回答：討議欄Bの被質問者には、回答執筆依頼を送付いたしますので、内容をご検討の上、著者回答を執筆していただきますようお願い申し上げます。
  - （7）討議欄での著者回答と発表：討議欄Aについては希望により研究発表会での発表が認められます。討議欄Bについては被質問者に連絡をした上で、その回答と合わせて掲載します。ただし、討議欄Bの発表会での発表は認められていません。
  - （8）討議欄の掲載料：1/2頁あたり2000円（討議回答については費用をいたしません）
  - （9）討議欄A・Bの討議用原稿提出締切期日：2005年2月11日（金）消印有効  
討議欄Bの著者回答原稿提出締切期日：2005年3月25日（金）消印有効
7. 送付先および問合せ先：土木学会土木史研究編集小委員会（担当職員：橋本剛志）  
〒160-0004 新宿区四谷一丁目無番地、Tel.03-3355-3559/FAX.03-5379-0125、E-Mail:hashimoto@jsce.or.jp

## 文化財ニュース

## 文化財となった土木関連建造物等一覧

## 重要文化財 (平成16年10月答申分)

所在地	名称	建設年代	特徴
京都府京都市	梅小路機関車庫	大正3年	設計鉄道院西部鉄道管理局、施工大林組。わが国に現存する最古のRC造機関車庫。大規模な架構や合理的な平面計画により、機関車修理などの効率的作業を可能とし、全国的な鉄道輸送力増強を支える一翼を担う。
山口県小野田市	旧小野田セメント製造株式会社竪窯	明治16年、同30年代増改築	西日本における建設事業の近代化を支えた旧小野田セメント製造株式会社の代表的遺構。わが国に完存する唯一のセメント焼成用竪窯として、近代窯業史上、価値が高い。

## 登録有形文化財 (平成16年9月答申分)

所在地	名称	建設年代	特徴
茨城県里美村	賀美発電所本館	大正8年	久慈川水系里川の中流域に建設された水力発電施設。換気に配慮し、開口部を広くとる本館をはじめ、法勾配3分の谷積石張の放水路及び余水路、丁寧なつくりの取水所からなる。
	賀美発電所放水路及び余水路	大正8年	
	賀美発電所取水所	大正8年	
	小里川発電所本館	大正14年	久慈川水系里川の上流域に建設された水力発電施設。RC造、玄関ポーチ付の本館をはじめ、欠円アーチのRC造管理橋を架けた放水路、余水路、わが国で初期の魚道付取水堰を中心とした取水所からなる。
	小里川発電所放水路	大正14年	
	小里川発電所余水路	大正14年	
	小里川発電所取水所	大正14年	
	徳田発電所本館	大正15年	里川水系発電施設の中で、最上流に位置する水力発電施設。外装下見板張の木造の本館をはじめ、谷積で精緻に築いた放水路、余水路、さらに重力式コンクリート造堰堤に排砂門、制水門を付設した取水所からなる。
	徳田発電所放水路	大正15年	
	徳田発電所余水路	大正15年	
徳田発電所取水所	大正15年		
神奈川県愛川町	平山橋	大正2,15年	中津川に架かる3連の鋼製下路式曲弦プラットラス橋。
鳥取県鳥取市	杣小屋拱堰堤	昭和26年	曳田川上流域に築かれたアーチ式の砂防堰堤。
鳥取県関金町	小鴨川第一号堰堤	昭和15年	小鴨川中流域に築かれた副堰堤付の重力式の砂防堰堤。
	小鴨川第三号堰堤	昭和18年	第一号堰堤の下流に築かれた重力式の砂防堰堤。
広島県尾道市	久山田貯水池堰堤	大正14年	重力式とアーチ式を複合したコンクリート造堰堤。
	長江浄水場着水井	大正14年	佐野藤次郎指導のもと水野広之進が計画を担当した尾道市創設水道施設で、原水を受けるRC造着水井、類例の少ない扇形平面の緩速ろ過池、ろ過池と同心の円形配水池からなる。
	長江浄水場緩速ろ過池	大正14年	
	長江浄水場配水池	大正14年	
熊本県三角町	旧三角海運倉庫(三角築港記念館)	明治20年頃	三角築港当初に建てられた倉庫として唯一の遺構。
鹿児島県薩摩川内市	新大橋	明治42年	反りのない縦断線形に近代性を示す石造2連アーチ橋。

(文化庁 北河大次郎、パシフィックコンサルタンツ 阿部貴弘)

書名	著者・编者	発行所・発行日	定価(税込)
都市保全計画—歴史・文化・自然を活かしたまちづくり	西村幸夫著	東京大学出版会 2004年9月	¥15,750
わが国との歴史的環境の保全の歴史を通じて「保全」の意味を考える。 欧米・アジア各国の保全の事例も豊富である。「保全計画」は、制度、関連する機関も網羅する。詳細な年表と東西の歴史的文書等を巻末に収録。			
産業遺産とまちづくり	矢作弘著、末松誠写真	学芸出版社 2004年8月	¥1,890
日本全国の産業遺産10件について、保存・活用の経緯と課題点を詳しく紹介している。ジャーナリスト出身の著者による徹底した取材と現場主義に基づいたリアルかつ優雅な対象の描写が、共著者の写真家による鮮やかな現場写真とともに展開する。産業遺産の実態像に対する読者の理解とともに「親近感」をも確実に引き出す、いわば“産業遺産の啓発書”といえよう。(近畿大学・岡田昌彰 評)			
コンクリートの文明誌	小林一輔著	岩波書店 2004年10月28日	¥3,150
『コンクリートが危ない』の著者が建設資材の視点から描いた文明の物語である。			

(日本ランドデザイン 横松宗治)

次年度から予算の関係上、土木史フォーラム4月号は休刊、8,12月号のみの発行となります。また、親委員会からは、会員への配布をpdfのメール配信またはホームページからのダウンロードとする意見も出されています。28回の発行を経て(No.0を含めば29回)、その目的と配信方法の再考が必要な時期となりました。(知野 泰明)

### 土木史フォーラム No.28

監 修：土木学会土木史研究委員会  
 発 行：土木史フォーラム小委員会  
 代表者 横内 憲久(日本大学)  
 事務局：日本大学理工学部 岡田 智秀  
 〒274-8501 千葉県船橋市習志野台 7-24-1  
 TEL&FAX.047-469-5427(直通)  
 Email : t-okada@ocean.cst.nihon-u.ac.jp  
<http://wf.ocean.cst.nihon-u.ac.jp/>  
 印 刷：(株)青孔社

## CONTENTS

<b>-NEWS</b>		
	2003 Admiration of Civil Engineering heritage by JSCE	1
<b>-FORUM</b>		
	The local activation policy which utilized civil engineering heritage" The Minatogawa tunnel" NISHIUMI Nobuyuki, TAKAGI Kouji	2
<b>-OVERSEAS NEWS</b>		
	Report on 31st Symposium of the International Committee for the History of Technology (ICOHTEC); Re-designing Technological Landscape OKADA Masaaki	3
	Johannis de Rijke had a son by his Japanese mistress MATSUURA Shigeki	4
<b>-LOCAL NEWS</b>		
	Civil engineering heritages and the educational activities MATSUKAWA Seiko	4
<b>-REPORT FROM CHSCE(Committee on Historical Studies in Civil Engineering)</b>		
	Report on "The Center of Archives and Historical materials on Science and Technology, NIHON UNIVERSITY" OKADA Tomohide	5
<b>-What's On</b>		
	Report on 2004 annual meeting of JSCE CHINO Yasuaki	5
	Report on 30 <sup>th</sup> meeting of Infrastructure Planning Review TANAKA Naoto	5
	Call for Papers of 25 <sup>th</sup> Annual Meeting of CHSCE	6
<b>-CIVIL ENGINEERING WORKS ON LATEST HERITAGE REGISTRATION LIST</b>		
	KITAGAWA Daijuro , ABE Takahiro	7
<b>-BOOK GUIDE</b>		
	YOKOMATSU Muneharu	8

編集委員会 委員長：横内憲久、幹事長：知野泰明

委員：阿部貴弘、岡田智秀、神田恭太郎、日野 智、榊山清人、山田圭二郎、横松宗治 学会事務局：橋本剛志